

## 「島の鳥類学—南西諸島の鳥をめぐる自然史—」

【講演】「『島の鳥類学』の面白さ—リュウキュウコノハズクを例に—」

高木昌興 北海道大学大学院理学研究院教授

「『南西諸島の鳥類学』の面白さ—オオトラツグミを例に—」

水田拓 (公財)山階鳥類研究所保全研究室長

【ディスカッション】高木昌興・尾崎清明(山階鳥類研究所副所長)・水田拓

ヤンバルクイナ、アカヒゲ、ルリカケス、リュウキュウコノハズク、オオトラツグミといった、鳥好きにとってあこがれの、そこでしか出会えない鳥たちが生息する南西諸島。日本政府は、この島々の世界自然遺産への登録を目指しています。世界遺産に登録されることは、言い換えれば全人類の宝として公式に認められたということになるでしょう。今回の鳥学講座は、南西諸島の鳥類の魅力とその研究について、南大東島を中心にひろく南西諸島をフィールドに、リュウキュウコノハズクの生物地理をはじめ、さまざまな研究を続けている高木昌興さんと、奄美大島で生物多様性の保全に携わりながらオオトラツグミの生態研究を行い、今年の6月から山階鳥研保全研究室長に着任した水田拓の二人がお話します。

2題の講演のあと、ヤンバルクイナの調査研究に、「発見」のときからかかわってきた尾崎清明・山階鳥研副所長も参加して、会場からの質問をいただいてのディスカッションの時間も取りますのでぜひいろいろなお話ができればと思います。

### ●●登壇者ご紹介●●



高木昌興(たかぎ・まさお)

1967年東京都出身。1997年北海道大学大学院博士後期課程修了。博士(農学)。日本学術振興会特別研究員(立教大学)、大阪市立大学准教授を経て、2016年から現職。小学生から鳥見をはじめ、識別にはまった時期を過ぎ、20代前半国内約430種確認で数え上げを止め、鳥学者として現在に至る。好きな鳥は研究対象のモズ類とコノハズク類、コミズクとイソシギも好む。



水田拓(みずた・たく)

1970年京都市出身。2000年京都大学博士後期課程修了、博士(理学)。日本学術振興会特別研究員(東邦大学)、環境省奄美野生生物保護センター勤務を経て、2019年6月から現職。あまり熱心ではないが、通勤の途中でモズなどを見かけたりすると少し得をした気分になる程度のバードウォッチャー。好きな鳥は研究対象のサンコウチョウ、トラツグミ類、ヤマシギ類など。



尾崎清明(おざき・きよあき)

1951年生まれ。(公財)山階鳥類研究所副所長、日本鳥学会会長。博士(理学)。小学生の時は昆虫、中学生で鳥、高校ののち訪れたドイツで鳥類標識調査に目覚める。大学卒業後、山階鳥類研究所に入って、国内外で標識調査や講習会を実施。トキの捕獲やヤンバルクイナ発見に従事して以来、希少鳥類保全にも関わっている。

# ●●● 「島の鳥類学—南西諸島の鳥をめぐる自然史—」 ●●●

## 「『島の鳥類学』の面白さ—リュウキュウコノハズクを例に—」

高木昌興 北海道大学大学院理学研究院教授

日本は大小様々 6800 個以上の島から構成される島国です。日本の鳥にとって、島は大切な生息場所です。日本の島の鳥というと、皆さんは何を思い浮かべますか。日本海側に位置する舩倉島や飛島を通過する珍しい渡り鳥、伊豆諸島とトカラ列島だけで繁殖するアカコッコやイイジマムシクイ、小笠原諸島で絶滅したオガサワラガビチョウやオガサワラカラスバトでしょうか。岩礁で繁殖する海鳥を思う人もいるでしょう。私は島の鳥を考えると、その種構成の貧弱さにワクワクします。そして貧弱に見える島の鳥の由来や特徴的な生態について解明したいという思いに駆られます。

私の講演では、島の鳥を学術的に楽しむための情報を提供したいと思います。まず注目する点は種構成（鳥類相）です。日本の島を一つ一つ見ていくと、本土に比べると種数が少なく多様ではありません。貧弱に見えます。島に生息できる鳥類（生物）の種数にはルールがあり、本土からの距離と島の面積で決まります。しかし、そのルールには島の鳥類相の歴史が入っていません。時間軸を考えに入れると貧弱に見える島の鳥類相に多様性と進化を見いだすことができます。また、島々の環境には大陸や本土とは異なる共通した特徴があります。島に生息する鳥は、その特徴に

規定され、島のルールのもとで形質を獲得すると考えられています。これら 2 つのルールについて解説します。

次に琉球列島に広く分布するリュウキュウコノハズクについて紹介します。南北に長い琉球列島ですが、リュウキュウコノハズクは同じ種として扱われます。しかし鳴き声を調べてみると特徴が大きく異なる 2 つのグループに分けられることがわかりました。捕獲して体の大きさを比較してみると同様な 2 つのグループと、もう 1 つ特徴的なグループがあることがわかりました。遺伝解析で 3 つのグループの由来を調べたところ、2 つのグループは非常に深い歴史を経て出来上がったものであることがわかりました。鳴き声、体の大きさ、遺伝子の調査からリュウキュウコノハズクの進化の歴史の一端が明らかになったのです。さらに、ある島では深い歴史を持った 2 つのグループの個体が交雑していることがわかりました。リュウキュウコノハズクは、これからさらに変化していく可能性が見えてきました。

「島の鳥を見ることは進化を見ること」であることをお伝えし、バードウォッチングの楽しさの一つに、学術的な楽しさを加えていただければと思います。

## 「『南西諸島の鳥類学』の面白さ—オオトラツグミを例に—」

水田拓（公財）山階鳥類研究所保全研究室長

九州と台湾の間に連なる島々、南西諸島。日本の南西にあるから「南西諸島」とは身も蓋もない呼称ですが、その味気ない呼称とは裏腹に、この地域の生き物は魅力に溢れています。自然に特段の関心はないけれどルリカケスやヤンバルクイナなら知っているという人も多いことでしょう。南西諸島の魅力は、自然が豊かで生き物がたくさんいることとともに、これらの鳥のようなそこにしかない生き物、つまり固有種が多いことであるといえます。では、なぜ南西諸島には固有種が多いのでしょうか。それにはこの島々の成り立ちが深くかかわっています。現在の南西諸島のある地域は、かつてユーラシア大陸の端っこに位置していました。それが、地殻変動や海水準の上昇により大陸とくっついたり離れたりを繰り返し、ついには完全に島になりました。ここにいた生き物たちは大陸から取り残され、独自の進化を遂げたのです。したがって、島に固有の生き物について調べることは、島の成り立ちやそこにいる生き物の進化、さらには島独自の環境とその保全について考えるきっかけになります。

さて、南西諸島の中で沖縄島に次いで大きい島、奄美大島には、オオトラツグミという鳥が住んでいます。本州などにいるトラツグミの亜種とされていますが、独立した別種と考える人もいます。

いずれにしても、オオトラツグミもまた、ルリカケスなどと同じくこの島に取り残され独自の進化を遂げた生き物なのです。そんな珍しい鳥が、1990 年代には激減し絶滅が危惧される状態となりました。地元の NPO 法人奄美野鳥の会は、このころからオオトラツグミのさえずりを聞いたモニタリングを開始しました。現在も続くこの調査によると、近年この鳥の数は回復傾向にあることがわかっています。調査をもとに個体数を調べると、2000～5000 羽程度はいるだろうと推定されました。また、生息環境を調べた結果、近年の個体数の増加には、伐採の減少による森林の回復とマンガースの捕獲作業の進展が影響していることが示唆されました。

100 万年を超える時間をかけて進化してきたオオトラツグミ。奄美大島の森に住むこの鳥について調べるためには、鳥だけでなく森そのものやそこに住む他の生き物にも注目することが重要です。オオトラツグミを調べ、守ることは、この鳥だけでなく奄美大島の森に住むすべての生き物を守ることにつながるのです。なお本発表の内容は、NPO 法人奄美野鳥の会のオオトラツグミ一斉調査ならびに環境省のオオトラツグミ保護増殖事業の成果の一部です。